

# 独立自尊のすすめ

## 福澤諭吉が日本人に遺したもの



福澤諭吉

ふくざわ ゆきちー 天保5(1835)年(明治34(1901)年、明治期を代表する思想家。大阪生まれ。父の死後中津に戻り、その後、大阪に出て緒方洪庵に蘭学を学ぶ。万延元(1860)年から慶応3(1867)年にかけて幕府の遣欧使節団などで3度の洋行。4年慶應義塾大学を創設。『学問のすすめ』『文明論の概略』など著書多数。

幕末・明治期を代表する思想家・福澤諭吉。「文明開化論者」「啓蒙思想家」「欧化論者」として広く知られる福澤だが、実は旧士族社会の士風を重んじる「ナシヨナリズムの精神」を非常に強く持った人であった。五十年以上にわたり福澤の著作に親しんできた拓殖大学学事顧問の渡辺利夫氏に、福澤の知られざる実像に迫っていただいた。

### 渡辺利夫

拓殖大学学事顧問



わたなべ・りしおー 昭和14年山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業後、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学長、第18代総長などを経て、現職。外務省国際協力有識者会議議長、アジア政経学会理事長なども歴任。JICA国際協力功労賞、外務大臣表彰、第27回正論大賞など受賞多数。著書に『アジアを救った近代日本史講義』(PHP新書)『士魂-福澤諭吉の真実』(海竜社)などがある。

### 福澤諭吉の知られざる実像

福澤諭吉と聞けば、多くの方が激動の幕末・明治期に、「西洋文明を取り入れ新生日本の建設に精出すべし」と説いた、文明開化論者、欧化主義者としてのイメージを思い浮かべることでしょう。

少し詳しい方なら、福澤は「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と語った天賦人權説の人であり、「政府は国民の名代にて、国民の思う所に従い事を為すものなり」と主張し、社会契約説の立場をとった啓蒙思想家だと理解しているかと思われます。福澤諭吉の名を世に知らしめた明治初期の一大ベストセラーである『学問のすすめ』には、確かにそのような内容が書かれています。

それからもう一つ、世に広く知られる福澤像を決定づけているのが、福澤が晩年に著した『福翁自伝』に記された「門閥制度は親の敵を御座る」という強烈なメッセージです。同書には、無類の学問好きであった父・百助が、「中津藩では、漢籍において彼に敵う人物はいない」といわれるレベルにま

で達しながら、下級士族であったために、学問を通じての身分上昇は叶わず、失意の生涯を送ったことなどが書かれています。

そして福澤は、「門閥制度は親の敵を御座る」という旧社会への憤懣を抑えられず、親の敵を討つために西洋の学問の修練に努めるより他なしと決意。長崎で蘭学を学び、次いで大坂に出て緒方洪庵のもとで才能を見出され、さらに東京に出て英学に転じて、知識人としての道を歩み始めるのです。

しかし、『学問のすすめ』や『福翁自伝』のストーリーから浮かび上がってくるイメージは、福澤の実像を正確に捉えているのでしょうか。福澤は生涯にわたって膨大な文献を書き遺しています。私は学生時代から現在に至るまで、折に触れて福澤の著作に親しんできたのですが、文明開化論者、欧化主義者、啓蒙思想家といった福澤の世間のイメージは、彼の思想のほんの一面にすぎないことを、読むたびに悟らされてきました。

## 特集 一剣を以て起つ

第二次大戦前の昭和十四年に生まれ、青春時代に安保闘争、全共闘運動に囲まれてきた私は、戦後の日本が左翼リベラリズムの強い

特殊な時代であることを身を以て知っています。そして世の福澤像も、実はその左翼リベラリズムの時代において「造作」された非常に偏った福澤像なのです。自らの思想的淵源を福澤諭吉という権威に求めたいという、左翼知識人の願望が、偏りを持った福澤像を生み出したのだと私は考えます。

### 旧士族社会の道徳を失ってはならない

これまでの福澤像の対極を鮮やかに浮かび上がらせている論説の一つが、明治二十四年に脱稿された『瘠我慢之説』です。福澤は同書で、徳川幕府において高位の幕臣であったにもかかわらず、明治新政府で再び要職に就き権勢をふるった榎本武揚と勝海舟の出入進退を、「武士は二君に仕えず」といって徹底的に非難しています。様々な文献を調べる限り、福澤

が『瘠我慢之説』を書ききつかけとなったのは、概ね次のような事情があったのだと思われまます。

福澤は明治二十四年の秋、明治維新を経て静岡の駿府城あたりに移封された徳川藩の様子に気がなりました。そして途次、清水港に近い興津清見寺に建立されたと聞く「威臨丸殉難諸氏記念碑」を訪れ、その死者を弔うのです。

しかし、線香を上げた後、石碑の後ろに回ってみると、そこには「従二位榎本武揚」の名で「人の食を食む者は人の事に死す」(徳川家の幕臣として仕え禄を食んだ者は徳川家の事に死すべきだ)と記されておられ、福澤は驚きます。

榎本は、江戸城開城後に軍艦八隻を率いて品川を脱出し、函館に入港。ここに蝦夷地政府を樹立するに至りましたが、官軍による猛攻を受けて降伏、東京に護送され禁固刑を受けます。ほどなくして赦免を受け、その後は北海道開拓使を皮切りに、文部大臣、樞密院顧問官、外務大臣、農商務大臣など華麗なる経歴を歩みました。函館で榎本に会い、官軍への投降を拒否して惨たる戦死を遂げた

部下をそのままに、明治新政府で大きな重用を受け名声をほしいままにしている者が、後世に残る石碑にそんなことを刻みつけていはいが、という怒りが福澤の心頭に発したものと想像されます。そして怒気を含んだ気分を収めることができないう福澤が東京に戻り、一気呵成に書き上げたのが『瘠我慢之説』だったのでした。

福澤は、榎本の出入進退について、次のように記しています。

維新の際、脱走の一挙に失敗したるは、氏が政治上の死にして、仮令いその肉体の身は死せざるも最早政治上に再生すべからざるものと観念して唯一身を憤み、一は以て同行戦死者の霊を弔して又その遺族の人々の不幸不平を慰め、又一には凡そ何事に限らず大挙してその首領の地位に在る者は、成敗共に責に任じて決して之を通るべからず、成ればその榮譽を専らにし敗すればその苦難に当るとの主義を明にするは、士流社会の風教上に大切なことなるべし。即ち是れ我輩が榎本氏の出処に就き所望の一点にして、独り氏の一身の為めのみならず、国家百年の謀

に於て士風消長の為めに軽々看過すべからざる所のものなり。

戦いに勝てばその榮譽を受けてもよいが、敗退した者はその責を負うべきであり、敗退の後には苦難の道を歩まざるを得ないのは当然ではないか。これはかつて武士として生きた人間であれば、主義として擁していなければならぬことだ。榎本は戦いに敗れ、あまつさえ脱走に失敗して捕らえられたのであるから、これは「政治上の死」を意味する。にもかかわらず国境で再生を図るとは何事か。

自分が榎本の身の処し方にコメントするのは、榎本を個人として難じたいからではない。榎本は武士としての考え方や行動規範から逸脱しており、そのようなことが平気でなされるようであれば、一政権、一国家のために死を賭して戦おうとする人間がいなくなってしまうのではないか。国家永続のためにも決して看過してよい問題ではない、と福澤は言うのです。

福澤はその返す刀で、同じく元幕臣でありながら、明治新政府で栄達を極めた勝を斬りつけ、激越な非難の言葉を投げつけます。

えば、豈計らんや身は既にその殻と共に魚市の俎上に在りと云うことあり。国は人民の殻なり。その維持保護を忘却して可ならんや。

国家とは生身の青螺の殻のようなものであり、殻が外敵に壊されてしまえば、そもそも国民の生命や財産の守護などできない。近年の厳しい国際情勢の中で、その現実を直視することなく、民権と国会開設について騒いでいるだけでは国家の存立自体が危うい。青螺の比喩を巧みに用いて、そう福澤は警鐘を鳴らしているのです。

そのように、実際の福澤は、自由民権論者というよりも国権論者に近く、現実即ち物事の優先順位、「事の軽重」を格別に見極めていく徹底したリアリストであったといつてよいでしょう。

現在の日本も、中国の海洋進出や北朝鮮の核開発など、様々な難題に直面していますが、国会やメディアでは、それほど重要とは思えない問題に延々と時間と労力が費やされています。日本にとって一番大事なことは何なのか、いま何をしなければならぬのか。特に組織や人の上に立つリーダーに

## ナショナリズムこそ立国の公道

実は『瘠我慢之説』は、「立国は私なり、公に非ざるなり」の一文から始まります。これは、自分が属する共同体や国家を愛する「私情」、すなわち「ナショナリズム」がなければ自国の独立を守ることできない、という意味です。

さらに福澤は、「勝敗の極に至りて始めて和を講ずるか若しくは死を決するは立国の公道にして、国民が国に報ずるの義務と称すべきものなり。即ち俗に云う瘠我慢なれども、強弱相対して苟も弱者の地位を保つものは、単にこの瘠我慢に依らざるはなし」と、とりわけ一国が衰退の危機に陥るような時期においては、死んでも国を守るといふ私情を持つことが公道であり、瘠我慢の精神であり、国民の義務であるとさえ言っています。そして、群雄割拠の時代に徳川家の旗のもとに参じ、徳川家康のこのみを考え戦い抜いた三河武士を、瘠我慢の義をいかに発揮した歴史上の一例として生き生きと描いているのです。明治十年に書かれた『丁丑公論』でも、明

は、その「事の軽重」を見極める見識、リアリズムを、いまこそ福澤に学ばなければなりません。

## 日本人が忘れてしまった「独立自尊」の精神

福澤の最高傑作として、明治八年に出版された『文明論之概略』を挙げる方は多いのですが、私もその議論の密度と説得力、文章の格調の高さからして全く異論はありません。実際、同書は福澤が最も知力旺盛な時期にその力の限りを尽くして書き上げた大作です。

とはいえ、『文明論之概略』で福澤が伝えたかった「結論」を知っている方はそう多くはないのではないのでしょうか。ほとんどの方が『文明論之概略』は、福澤が日本の文明開化の必要性を正々堂々と論じた傑作だという、世に広く流布されているイメージをお持ちだと思います。しかし、それも福澤の文章そのものに当たりながらよく検討して見る必要があります。

「西洋の文明を目的とする事」「日本文明の由来」など、様々な観点から文明について論じた上で、福澤は第十章の結論部に入り、何より重要なことは何かと問うて、次

治新政府に反旗を翻した西郷隆盛を批判する時の政府とジャーナリズムは、西郷の「士風」を軽んじて「抵抗の精神」を衰退させる「文明の虚説」である、と難じています。福澤が武士の士風、私情を損なった榎本や勝を、徹底的に非難した理由もこの点にあります。

文明開化論者、欧化論者のイメージの強い福澤が、その対極にある旧士族の道徳の大切さを、とことん説いていた事実を知っている方はそう多くはないはずです。

## 物事の優先順位を 格別に見極める

福澤論者といえは、「国権」よりも「民権」の大切さを説いた自由民権論者だとみなされがちであり、事実そのように記している解説書がいまでも数多くあります。しかし、国会開設や普通選挙の実現など、自由民権運動が大きな政治的潮流となっていた明治十四年に書かれた『時事小言』の緒言で、福澤は次のように述べています。

記者（福澤）は固より民権の敵に非ず。その大に欲する所なれども、民権の伸暢は唯国会開設の一

のように論理を転換させます。

目的を定めて文明に進むの一事あるのみ。その目的とは何ぞや。内外の区別を明にして我本国の独立を保つことなり。而してこの独立を保つのは文明の外に求むべからず。今の日本人を文明に導くはこの国の独立を保たがためのみ。故に、国の独立は目的なり、国民の文明はこの目的に達するの術なり。

福澤は、何のために日本が文明化するのかと問えば、それは自国の「独立」を保つためであり、文明はその「術」にすぎない、と結論づけているのです。日本の目下の最大の課題は独立であって、独立のための手段として文明を捉えるべきである。思考の順序を取り違えては絶対にならない、というのが福澤思想の核心だといえます。

ここまで、世間とは正反対ともいえる福澤論者像を紹介してきましたが、福澤が遺した思想は、現代日本に深淵な問いを投げかけているように思えてなりません。

戦後七十二年、とりわけ高度成長期の日本人は、ひたすら真っ黒

挙にして足るべし。而して方今の時勢これを開くことも亦難きに非ず。仮令い難きも開かざるべからざるの理由あり。然りと雖も国会の一挙以て民権の伸暢を企望し、果して之を伸暢する国柄は如何なるものにして満足すべきや。民権伸暢するを得たり、甚だ愉快にして安堵したらんと雖も、外面より国権を圧制するものあり、甚だ愉快ならず。

もちろん自分は民権論に反対ではないが、民権はただ伸張すればよいというものではない。国会を開設し、どのような「国柄」の国家を建設すべきかという肝心の問題を議論するのだから、民権など論じても詮なきことだ。西洋列強による干渉や介入が恒常化しているいま、ただ国会を開設すればよいというほど事態は単純ではない、というのが福澤の主張です。さらに緒言はこう続きます。

俚話に、青螺が殻中に収縮して愉快安堵なりと思ひ、その安心の最中に忽ち殻外の喧嘩異常なるを聞き、切かに頭を伸ばして四方を窺

になるまで働き、経済大国に成長し、まるで日本の時代がやってきたかのように吹聴してきました。

しかし現在の日本は、平成不況に嵌り込んで以降の長期低迷から脱する見込みがなお立たず、少子高齢化の急速な進行により、経済社会全体が衰亡の様相を呈するに至りました。国際社会においても、自国の防衛を他国に依存しながらぬくぬくと生きてきたために、国際秩序が大きく変わろうとしている中で、右往左往せざるを得ない状況に立ち至っています。

それも戦後の日本人から、福澤が説いた、自分の国や地域は自分で守るといふナショナリズム、何のために経済大国になるのかという根本的な問い。そして敵しさを増す国際社会の中で、「一剣を持して起つ」という気概、「独立自尊」の精神がすっぽり抜け落ちていたからだろうと思います。このままでは日本の独立はやがて危殆に瀕してしまふに違いありません。

激動の幕末・明治期に苦渋に満ちた思考を強いられた、大いなるナショナリスト、福澤論者の声に最も耳を傾けるべきは、現代の日本人なのだろうと私は思います。